

essay

一条の灯（ともしび）

出所しました（電話編）

令和の10連休が明日から始まろうとする、夜8時、
事務所を出ようとする私に、電話がかかりました。

「もしもし、Mです。昨日、出所しました！

今、福岡の更生会に来ています。

暫く、福岡でお世話になり、郷里の熊本に帰ります。」

「Mさん、出られたんですか！良かった！何年ぶりかいな？」

「30年ぶりですよ！アベ先生、

私は、もう頭禿げちゃって、（会っても）もうわからんですよ！」

「30年ぶりと言うことは、私が弁護士になって10年くらいの
時に担当したの？」

「そうです。熊本地裁で、強盗殺人で無期懲役になり、ダメだとは思ってましたが、福岡高裁に控訴したら、アベ先生が、
高裁で国選弁護人で、来られたんですよ！」

「（下手な弁護で申し訳ありませんでしたとは言わなかったけど、）
そうですか！でもどんな事件かはもう忘れたよ！」

「でも私が、刑務所に服役した後も、先生から、ずっと毎年、
暑中見舞い、年賀状をもらい、その文面に勇気付けられたんですよ！」

「そうですか！やっぱり、出す以上は面白い事書かないといかんけん
凝りに凝りまくったものを出しよるもんね。
（妙にカッコつけて照れくさがっている。）」

何かそんな会話が続いた。



実を言うと、私は、年賀状を1000枚以上出していると、宛先の人がどんな人かもわからなくなってくる。

Mさんは、岡山に住所があり、何で私は、岡山の知らない人に年賀状を出しているのかと思ってその岡山の住所を調べてみた。

果たして、そこは刑務所だった！

そして、古株事務員さんにそのMさんの記録を探してもらうと、強盗殺人で無期懲役の判決だったことがわかった。

要するに彼は、物を盗った上に人を（多分一人）殺したと思われる。

まかり間違えば死刑である。

よくそんな人を弁護ししかも長い付き合いを？してきたなあと思った。

しかし、被告人から教えられることも多いし、私と被告人がどこが違うかと言われても違わないんじゃないかと思う。

こう言う調子だから、私は判決が言い渡された後でも被告人と付き合いが続く時がある。 Mさんの場合もそうだったんだろう。

それが30年間続いた。

Mさんは、手紙の中で、しきりに自分が真面目に服役していること、色々な資格取得に挑戦している事、テレビから聞こえてくる日本の世相が心配なこと、どう言う作業訓練を受けていること、带状疱疹にかかったことなどをたくさんの便箋に書いてきていた。

そして、思いがけなくも、服役の態度が良かったために仮釈放の審査が始まったことなどを今年の私の年賀状の返事で書いてきた。然し、無期懲役の受刑者がそう簡単に出所出来るだろうかと半信半疑だった。

それが、期間も早く出所できるとは！

今、彼の人生に希望と活力がみなぎってきたに違いない。

そのお手伝いの幾分かをできたのではないかと、自分で言うのもなんだが、我が意を得たりという感じだ！



弁護士というのは、最高裁で勝ったり、沢山の弁護士を持つ大きな事務所を持つことではない。

その前にすべき事がある。

それは、

誰からも助けを得られない人に手を差し伸べる事。

真つ暗な闇を航海する一葉の船を照らす一条の灯台の光のような存在という密かな思いが届いたような気がした瞬間だった。

出所しました！（面会編）

Mさんが、無期懲役（強盗殺人）から、奇跡の仮釈放の権利を得て、元、高裁で国選弁護を担当した私に、仮釈の電話が入ったのは、令和の大連休の始まる前の事であった。

そして、6月の下旬、とうとう、そのMさんから、私に会いたいとの電話があった。正に30年以上ぶりの再会である。

私も、彼の現状、これからの事、そして、何より、塀の中の、辛い生活のことなどを聞きたかった。

最初に何から、話していいやら…。

事務所に入ってきて、帽子を取って挨拶した彼は、ツンツルテンの頭を撫でながら、「とうとうハゲちゃいました！」で話は、始まった。

「先生の看板を地下鉄を上がって、探して見つけた時は、希望の光を見つけたような気持ちになりました。」

辛さを感じせることもなく、笑顔で、

対処してくれる彼に私は、

早くも、ジーンと来た。



「良く出られたね！ どうして出られるようになったの？」

「私も、強く期待したり、必ず出られるとは思っていませんでした。
何せ、無期懲役ですからね。」

「よくヤケにならんやったね。」

「なりましたよ！

みんななりますよ！

どうせ出られないと分かっているのですからね。」

「Mさんの場合は、どう克服したんですか？」

「私も、やはりヤケになって、刑務所の刑務官と喧嘩して、投げ飛ばしたんですよ！

柔道の心得があったので、刑務官はすってんころりと倒されたんです。

これじや、私は、懲罰が待っていると思ったんですが、その刑務官は、
どうしたものか、

『これは、俺も言いすぎた分がある。喧嘩両成敗だ。懲罰の申請は、しない！』

と言ったんですよ。そのかわり、俺は、お前を今後ずっと見張っとくと
言われたんですよ。」

「その時、刑務官の中にもこんな人がいるんだと、ちょっとショックを受けたんです。」

「それで、逆にこれ以上、刑務官に逆らっても、何の意味もないと、
漠然と思ったんです。」「何のために逆らうかと考え始めたんです。」

「そんな中、私の父が、なくなりました。私は、親の不幸にこんなところにいて、
本当に、自分が情けないと思いました。

すると、ある日、その刑務官が、お前の代わりに、お父さんの墓参りに
行ったぞと言いました。」

「私は、そこでも、この刑務官が、私を人間的に扱ってくれた事に本当に
感謝しました。」



「ということは、刑務所の中には、とんでもない刑務官が一杯いると言う事ですか？」

「一杯どころの話じゃないですよ。

極限状態です。」

「刑務官は、自分に媚びを売る人間には優しいし、刃向かう人間には、懲罰でも、嫌がらせでも、嘘の報告でもなんでもします。」

「一方、受刑者の間でも、喧嘩や、ゴマスリが絶えません。プライバシーは、ありません。

序列が出来上がって、牢名主みたいな人が仕切っています。」

「幸い、私は、1人部屋になり、8人の雑居部屋とは、おさらば出来ました。」

「私の知っている被告人でも、普段大人しい男だったけど、妙に因縁をつけ、絡んでくる奴がいたので、半殺しにしてやったとか言っていたので、そう言うことは、あるんだね。」

「ありますよ！しょっちゅう！」

「よくぞ、ヤケにならんやったね！懲役は、苦役だから、作業をしてもお金にならんやろう？」

「いや、少しですが、日当を貰えます。私は、5等級のうちの5等級になりましたので、時給52円90銭貰いました。1級は、タダみたいなもので、4級になると47円30銭、3級は、39円60銭です。1級から、5級になるのに、四、五年かかりました。」

「出る前は、炊事係で、これは、エリートコースです。」

「1ヶ月のうちに、1万円から1万2000円くらい収入が、あるのですが、そのうち、五千円くらいを生活費に回した後は、貯金しました。母親が仕送りしようと手紙をくれましたが、こんな親不孝をしているのに、今更、親の恩にすぎることは、出来ませんと言って断りました。」



「これから先の就職のめどは、付いているの？」

「大丈夫です、解体業の職人として雇ってもらってます。」

「Mさんの素性は、わかって雇ってもらってるんですか？」

「はい、その社長は、私のような人たちを雇ってくれるベテランです。」

「私は、もう60を過ぎているのですから、寮に住み込ませてもらい、寮長の肩書きをもらっています。」

「何か、刑務所にいる時に、技能や、資格は身につけましたか？」

「身につけました。ガス溶接技能者とか、アスベスト取扱主任者とか、5つくらい取りました。」

「それは、よかった。」

.....**.....

「先生、お昼時ですので、ちょっと、お昼でも一緒にいかがですか？
奢らせてください！」

「えっ！何言ってるんですか！」

「私が奢りますよ！お祝いだよ。地下にお寿司やさんがあるので、そこで、お寿司でも食べようか。」

「ありがとうございます。」

そこで、地下のお寿司屋さんに行って、2人、モグモグ食べ始めると、Mさんが、こう言った。

「先生、私、お寿司食べるのは、30年ぶりです！」



「えっ？ 刑務所出てから、まだ食べてなかったの！」

「美味しいです！美味しいです！」

「まだ仮釈ですから、短気は損気、十分注意しないとね。又、世間が、胡散くさい目で見ても、ヘラヘラっとしとかないかんよ。ハンディを追っている身だからね！」

「分かってます！先生から、毎年頂いた、書中見舞いや、年賀状にはげまされ、ここまでくることができました。（急に、私を褒め始める？！）」

「今は、全てが希望に見えます。出られるとは、夢にも思いませんでした。今からを大事にします。仮釈でも、何年か、善行を積み、刑を執行し終えた事になると聞いたことがあります。」

「へー、知らんやった。そんな事例扱った事ないもんね。調べとこう！」

お昼休みもこんな感じで、別れる時が来た。

私は、用意した「お祝い」を渡した。

彼は、お礼は、私の方がせんといかんとにと言いながら、受け取ってくれた。

これからも、ヤケを起こしたり、ムキにならんように暇だったら出て来んね！
と言って別れた。

なんとも、私にとっては、身に余る感謝の言葉や態度であった。

40年間弁護士をやって、
弁護士会では、40年表彰をしてくれるようだが、そんな表彰よりも、
1人の受刑者の、生き方に関わることができたという喜びの方が何よりのご褒美に思えた。